

## 新任教授のご挨拶

## 研究指向の病理診断医の育成をめざして

琉球大学大学院医学研究科細胞病理学講座 教授 加留部 謙之輔



琉球大学医学部医学科同窓会の皆様、初めまして。平成27年1月1日付で細胞病理学講座に赴任いたしました加留部謙之輔と申します。この度、同窓会長の蔵下先生のお計らいによりこの南風において皆様にご挨拶でき

ることを大変光栄に感じております。

私は平成12年(2000年)に九州大学医学部を卒業したのち、九州大学第1内科における2年間の内科研修を経て、病理学の世界に飛び込みました。病理の道に進むことにした理由として最も大きかったのは、研修期間の間に経験できた医療の2本柱である“診断”と“治療”のうち、“診断”により興味を覚えたからです。疾患の診断において、内科医の関わる比重ももちろん大きいのですが、私が特に興味を持っていた造血器腫瘍においては病理医の守備範囲が広く、当時は難解な病理診断用語についていけずに歯がゆい思いをしたのを覚えています。それならいっそのこと徹底的に勉強してしまえと、大学院生として勉強する地として選んだのは血液病理学の泰斗であった菊地昌広先生と大島孝一先生のおられた福岡大学でした。その後久留米大学に移った期間も合わせ合計7年にわたり、病理医としての研鑽を積み、病理学の考え方を身につけることができました。そこで形態像を中心とした病理学、病理診断に慣れてきた一方で、日常診断技術では見ることでできない分子学的なメカニズムに徐々に興味が移ってきたのを覚えています。この思いとともに、平成20年(2008年)に血液腫瘍の分子生物学的研究で日本および世界をリードしていた愛知県がんセンター研究所の瀬戸加大先生の研究室に籍を置くことになり名古屋に移りました。そこから丸5年間、遺伝子および培養細胞を通して見る血液腫瘍は、今まで顕微鏡を通しては飽きるほど見てきたはずなのに、とても新鮮なものでした。この「顕微鏡」と「遺伝子」の両方の視点から同じ疾患を

じっくり見ることができた経験は自分にとって宝であり、今後の研究生活の基盤となるものと思われます。また、これら福岡、名古屋での研究生活を通して、私のライフワークの一つである成人T細胞白血病/リンパ腫に出会うことができました。これは沖縄において特に頻度の高い疾患であり、今後この地で大きく飛躍させていきたいと考えた一分野です。さらに平成25年(2013年)からの2年間は、スペイン、バルセロナ大学のElias Campo教授のラボに留学することができ、まさに「顕微鏡」と「遺伝子」の両方の視点を見事に融合させて世界をリードする研究を進めている現場を見、そして参加することができました。

琉球大学細胞病理学講座は初代岩政輝男先生および先代の加藤誠也先生が実験病理と診断病理とのバランスの取れた教室運営をされてこられました。この伝統は私のキャリア、考え方とも非常にマッチすると考えていて、細胞病理学講座の同門の先生方といろいろなお話しをさせていただいている中でもこの思いを強くしている次第です。現在、病理学は従来形態像を中心に解析してきた時代から大きく変わろうとしています。ヒトゲノム計画の完了に伴い、各種悪性腫瘍に特徴的な遺伝子異常が次々に見つかっています。それとともに、これらの遺伝子異常を直接ターゲットにした分子標的薬の開発も急ピッチで進められています。これからは、このような治療に直結する遺伝子診断を取り入れた病理診断が求められ、そのためには分子病理、形態病理ともに精通した病理医、病理学者が必要な時代になってくると考えられます。この「新しい」病理学にキャッチアップし、リードできる若い病理学者を、自分の経験を糧にして育てていきたいと思っております。若輩者であり、ご迷惑をおかけすることもあるかと思っておりますが、一生懸命頑張りますのでご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。